いきいきまえばし人

前橋学市民学芸員
丸山 裕さん・68歳
鳥取町

新たな学びや知識を地元愛に

「地元を知ることが、地元愛につながる。その気持ちを大切に活動しています」

前橋の歴史や文化を学び、その魅力を発信する担い手、前橋学市民学芸員。丸山さんは学芸員として歴史ガイドやボランティア活動に取り組む。

「元々歴史が好きで、地元をもっと知りたいと思って学芸員になりました。講習や活動を通じて、新たな前橋の一面を知ることができています」

市内の歴史的名所を案内するガイドの活動がお気に入り。

「ガイドする時は、その場所のことをたくさん勉強してから臨みます。私が一方的に話すのではなく、参加者の話も聞き出して、対話しながらの案内を心掛けています」

ガイドには市内からの参加者が多いという。

「ガイドというと観光客のイメージが強いですが、私は地元の人に来てもらえるのもうれしい。今まで知られていなかった地元の魅力を伝えることが、地元への誇りや愛着につながると思っています」

「前橋のことならなんでも聞いてと胸を張って言えるよう、新しい学びや発見を楽しんでいきたいと思います」

丸山さんが伝える前橋の新たな顔。地元愛はこれからも広がっていく。

（関連記事5ページ）

萩原朔美 河畔奇譚

vol.17

圓前橋文学館
☎ 027-235-8011

前橋文学館長の萩原朔美が著名人と対談。さまざまな領域で活躍する館長が各界の人々とあれこれ語り合います。今回は、文学館で開催中の企画展「怖いを愛する―映画監督・清水崇の世界展」関連イベント「怖さと笑いは紙一重」での、清水崇監督と映画評論家のヴィヴィアン佐藤さんとの鼎談（ていだん）前編をお届けします。

萩原（以下H） 清水監督の映画は扉が多く出てきますよね。扉を開けるのが怖くなります。

ヴィヴィアン佐藤（以下V） 分かります。あと、必ず子どもが出てきますよね。

清水（以下S） 子どもって、自分も子どもの時代を経てきているはずなのになぜか理解できない。その辺を分かりたいのかもしれないです。

H 男の幽霊は出てこないですよね。髪の毛が長い。

S 僕だけでなく、アジア圏のお化けはそれが多いんですよね。

V 前橋にその思い出があったのでしょうか。

S かもしれないですね（笑）。でも実際、怖いことを描くのも、原点は幼少期。生まれ育った家の階段のあそこに…とか。

V 枯渇しないところがすごいですよね。アイデアがみなぎっているように感じます。

S 子どもの時は怖がりだったんですけどね。乗り越えたいんですかね（笑）。怖がりだったから、怖がらせる側に回れば自分が怖い体験をせずに済むというのがあったかもしれません。子どもの時からあれやってみて、と周りに指示を出していましたね。

V 子どもの時から監督だったんですね。

（4月1日号へ続く）

左から萩原朔美、ヴィヴィアン佐藤さん、清水崇さん

クローズアップ CLOSE UP

赤城山で楽しむ銀世界

2月1日、赤城山雪まつりを開催しました。今年は暖冬といわれていますが、赤城山は一面銀世界。大沼、第1スキー場、赤城少年自然の家、白樺牧場の4つのエリアで、ワカサギ釣りやスキー教室などを実施。訪れた人々は、さまざまな遊びや体験で冬を楽しんでいました。

好みの時代小説語らう

1月28日、図書館でおしゃべりリプロを開催しました。リプロとは、テーマに沿った本を持ち寄って紹介すること。今回のテーマ「時代小説」で思い浮かんだ本の、印象に残っているシーンなどを紹介しました。「人の意見は否定しない」というルールの下、笑顔で語り合いました。

ひな飾りが臨江閣彩る

臨江閣では3月15日㈰までひな人形展を開催しています。28日にはボランティアたちが写真を見本にしながら飾りつけ。江戸末期から昭和初期にかけて製作された段飾りや御殿飾りのひな人形14飾りが並びました。期間中の3月1日㈰には関連イベントもあります。